



日本記者クラブ研究会「アメリカの底流」

保守かリベラルか 現代アメリカにおける政治対立

東京大学

古矢旬教授

2007年11月2日

P2: ヒラリーはリベラルか？

P3: 「保守主義なき国家」から「レーガン保守連合」へ

P4: マッカーシーの恐怖政治

P5: 「バイタルセンター」の思想

P6: リベラルのマッカーシー論

P6: マッカーシズムは病理現象

P7: 南部民主党と共和党の「保守連合」

P8: 民主党の分裂

P8: 南部の2党化

P9: 「グラスルーツの保守」

P10: レーガンの保守連合

P11: 「ブッシュ連合」とレーガンの違い

P11: クリントンの成功がブッシュの放漫財政を生む

P12: ネオコンの台頭と凋落

P13: ラムズフェルドの失敗

P14: ヒラリーの「路線転換」？

P13～17: 質疑応答

©社団法人 日本記者クラブ

現在、来年(2008年)の大統領選挙を前にして、
どういう政治変化があるかということが、アメリカ
はもちろん、日本でも非常に話題になっており、注
目を浴びていますので、そのことを理解するための
幾つかの歴史的な背景についてお話してみたいと思
います。

私は、現在を理解するためには、歴史を知らなけ
ればならぬだろうと思いますし、目の前にある事
象をどれくらい深く歴史的に掘り下げていけば、も
っと深い理解に行き着くのかということを常に考え
ています。しかしその割には、私が現在のことを予
測すると、大概外れるのです。ですから、予測は
あんまりしないほうがいいだろうと思うのです。

2006年の中間選挙が終わった後、今からちょ
うど1年前に、岩波書店から出ている『世界』とい
う雑誌で、「中間選挙の意味」ということでインタビ
ューを受けたことがあります。そこでも私は幾つか、
もうすでに外れていることを言っているのです。な
ら、クリントンは多分だめだろうというような
ことを言っていて、クリントンが大統領になるよう
だったら、本当に大きな変化があったといえるのか
もしれないということを言ったわけです。

ヒラリーはリベラルか？

去年の選挙を見たときに、「これは非常に大きな変
化だ」とおっしゃる方もいました。つまり、「保守か
らリベラルにアメリカ政治が大きく転換したことの
あらわれだ」とおっしゃったわけですね。

僕は必ずしもそうは思えなかったのです。という
のは、グラスルーツの民衆の間にそれほど大きな世
論の変化があったわけではないのです。私の理解
では、去年の中間選挙というのはあくまでも、イラ
クの戦争の行き詰まりと、それから、ブッシュのリー
ダーシップに対する疑惑が大きな要因として働い
ていたのであって、必ずしもアメリカの政治が何十
年かに一度、あるいは1世代に一度かの大変化を起
こしたというふうには見えないわけです。むしろ保
守的な潮流というのは、徐々に徐々にしか変わっ
てきていないのではないのかというのが私の理解であ
ったのです。したがって、もし2008年にヒラリー・

クリントンが当選するようなら、これは「リベラリズム
の再生」といえるかもしれないというようなこと
を言ってしまったのですけれども、どうもこの数カ
月のクリントンをみていると、必ずしも彼女はリベ
ラルとして当選しようとしてはいないのではないか
という感じがしてきています。

例えば安全保障問題をとってもそうですし、最近
では国民皆保険の問題について彼女はあまり言わな
くなっていきますね。それから、ミドルクラスの牙城
に積極的に出かけていって、リーダーシップをかな
り保守的な言辞にのせて語るというようなこともあ
る。彼女が伸びてきた一つの原因は、やはりオバマ
にあるのだろうと思います。つまり、オバマが左に
立ってくれているおかげで、クリントンは安心して
中央に動いて活動できるということですね。オバマ
がいなければ、クリントンは転向というようなこと
を言われると思うのですが、オバマがかなり原則的
なリベラル路線というのを出していますし、黒人だ
めであるということもありますけれども、いまのクリ
ントンの成功を助けているのは、皮肉なことにオバ
マの前半戦での成功だったのではないかというふう
に私は考えております。

それでは現在の事態を一体どういうふうにする
か？これもかなり深いところで考えたほうがいいだ
ろうと思うのです。つまり、アメリカは保守に向か
っているのか、リベラルに向かっているのか、ある
いは、保守のままなのか、リベラルが大きく復活す
るのかというような、大きな枠組みで考えてみたい
と思います。その場合に、外交でいえば第2次世界
大戦後でいいと思いますけれども、内政でいえば「ニ
ューディール」という非常に大きな境目から考えて
いかなければならないということです。

リベラルと保守というのは、いまの世論でもいつ
でも大体そうなんですが、お配りした資料の6-1
ですね。大戦後の政治の中で、リベラルと保守と
いうのは、みずからを左側と右側に区別しながら、
有権者大衆の真ん中をとるための競い合いを行っ
てきたというふうには言っていだらうと思います。た
だ、このモデル的な、リベラルと保守がほぼ同じ勢
力でというのは、資料1のグラフをごらんいただく

と、この丸の大きさというのは変わってきているのがわかると思うのです。

資料1の左の図は、リベラルと保守ではなくて、共和党と民主党の支持率の差ですけれども、大体1950年代からレーガンの時代までというのは、民主党が黨員数としても圧倒的に多い。それから、支持率としても非常に高い。ですから、ある意味では、アメリカ型の1と2分の1政党(?)であったといってもいいような状態が続いています。ですから、このモデルの中で、大体戦後の80年代までは実際には保守はリベラルの半分ぐらいの勢力だったというふうに考えていいと思います。

それで、**資料1の右側**に行きますと、これはちょっと若い人、つまりカレッジを出たばかりの大学生に、イデオロギー的な自己規定を求めた世論調査の結果です。これを見ますと、1970年ぐらいから徐々に保守派が伸びていっています。伸びていったといっても、5%程度しか伸びていませんけれども。それと反比例してリベラルと左翼が減っていている。それで、この間に一番ふえているのは中道です。新しい大学生という、一番リベラルに動きそうな人でもこうなのです。

現実の社会の中では、80年代ぐらいからのアメリカの世論調査を長期的にみても、大体選挙でいえば民主党と共和党と、それから「インディペンデント」ですね。是々非々というのでもないし、それから無党派でもないと思いますが、とにかくインディペンデントというふうに、どちらの政党にも属していないけれども、選挙の状況と争点によって立場を変えていくという独立的な動き方をするという自己規定をしている人が、大体3分の1ぐらいずつだというふうに考えられます。

ということは、世論をみても、大体リベラルと保守というのは、それぞれ山のある部分というのはあるけれども、正規分布をしているだろうと考えられます。ですから、6-1がモデルになります。このモデルが確立されるのは、大体1970年代の中ごろから80年代の初めぐらいにかけてだろうと思います。

これだけ見ていくと、保守というのがどうい

歴史的な背景から勢力を伸ばしてきたかということとはなかなか見えてこないし、リベラルがなぜ戦前期から1960年ぐらいまでは圧倒的に優越したのかということも、このモデルを見ただけではなかなかわかりません。

私が1970年代にアメリカ研究に入ったころは、「アメリカはリベラリズムの国である」という非常に強力な通説がありまして、保守という政治思潮はアメリカには一般的にはないというのが当時の常識だったわけです。幾つか非常に有力な尊敬できる歴史家も、アメリカはリベラルの国だと言っていた。ここにちょっと名前を挙げておきましたけれども、ライオネル・トリリングという人は1950年に「アメリカはリベラルの国だ」と言ったし、それどころか、「アメリカには保守という思潮は全くない」ということまで言ったわけですね。それを受けて、55年にルイス・ハーツという大変すぐれたハーバードの歴史家が『アメリカ自由主義の伝統』という本の中で「アメリカの政治的な伝統というのはリベラルしかない」ということを言っていたわけです。

「保守主義なき国家」から「レーガン保守連合」へ

しかし、「レーガン革命」(**資料6-5**)によって、かつて1930年代、大恐慌の後にニューディールで民主党が大連合を組んだのとちょうど対照的な位置に、いわばレーガンの大連合、レーガンの保守の大連合というのが生まれてきたわけですね。そうすると、ライオネル・トリリングだとかルイス・ハーツだとかの「保守主義なき国家」という規定から、この「レーガン保守連合」へどういうふうに動いたのかということが、アメリカの戦後の政治史の最大の問題だろうと私は思っています。

それが最近ではイラク戦争の前後から「ネオコン」ということが非常に言われるようになった。ネオコンは確かに「新しい保守主義」だと思いますし、ネオコンが専らブッシュ息子政権の屋台骨を支えてきたというようなことを言われてきたわけですが、それが一体レーガンの保守連合とどういう関係にあるのかということは、その次の段階での問題になります。さらにそれが、いま、ヒラリー・クリントンに移る

としたら、それはどういう政治変化なのかということ。これがやはりアメリカ政治の底流として考えなければならぬ問題だろうと思うわけです。

私は修士論文は1950年代のマッカーシズムという、アメリカの赤狩りの話から入ったわけです。これはなぜかという話をしていると長くなりますけれども、マッカーシズムはアメリカ人のリベラルにとっては恐るべき現象でありまして、それから、マッカーシーという人間は、一般庶民にとっても、必ずしも賛成できる人間ではなかったということがあります。

マッカーシーの恐怖政治

それから、共和党の上院議員だったマッカーシーですが、少数右派政党、あるいは少数保守政党にすぎなかった共和党がマッカーシーを見たときも、必ずしも彼の行動というのは賛成できるものではなかった。マッカーシーは反共主義者なのですが、反共主義を貫くために彼が行ったことというのは、例えば議会の規則のじゅうりんであるとか、何の証拠もないのに自分の政敵を共産主義呼ばわりする。記者会見の場で、真っ白な紙を挙げて、ここに国務省共産主義者のリストがあると云ったりもした。そのリストに載せられた人数も「50人から200人」というわけで、ひどいデマゴーギッシュな政治をやったのですね。

ところが、1950年の段階では、ごりごりの反共主義者のマッカーシーは、アメリカの政界の中で大統領に次ぐ権力を持っている。1950～52年は彼の絶頂期です。当時、大統領はトルーマンですけども、トルーマンに匹敵する影響力を持つに至ったとさえ言われたわけです。

マッカーシーの政治手法は、明らかにエリート好みでもないし、保守好みでもない。それはマッカーシズムについて書かれた本のタイトルを見ても分かります。「Politics of Fear」「Politics of Unreason」「Politics of Paranoia」等々、全部マッカーシーについていわれたわけです。恐怖政治ですね。

ニューディール派のリベラルを倒すために、マッカーシーは共産主義という争点をそういう乱暴な使

い方をしたわけですが、このマッカーシーで一番困ったのはだれかということ、実は1952年に共和党から出て大統領になったアイゼンハワーだったわけです。

アイゼンハワーは、民主党で出るか、共和党で出るか、大分迷った末に共和党から出たわけです。アイゼンハワーは、いってみれば都市派のウォールストリートを背景にした候補者として共和党から出て、大統領になるわけですが、このとき、リベラルのほうは候補者の選任を誤って、アイゼンハワーが圧勝になります。このときに、あたかもこのリベラルと保守との勢力値は、これをそのまま民主党と共和党に置きかえると、保守が非常に大きくなったように見えたかもしれないけれども、実はアイゼンハワーというのもニューディール政策の根本は変えませんから、ニューディール派の民主党と全く変わらない状態で、政権だけが共和党に移ったという選挙だったのです。

ところが、マッカーシーとの関連で、アイゼンハワーにとって非常に困ったことが起こってしまった。アイゼンハワー及び共和党の主流派は、マッカーシーを利用して20年に及ぶ民主党一党独裁政治を崩していったわけですね。しかし、実際に政権をとってみたら、今度はマッカーシーが、あろうことか、アイゼンハワーを共産主義呼ばわりし始めるわけです。マッカーシーはアル中で1956年に亡くなる、かなり変わった人ですけども、相当アイゼンハワーを苦しめます。結局、マッカーシーが最後につぶれたのは、陸軍に共産主義者がいるとやったことによるのです。つまり、陸軍というのは、第2次世界大戦を勝ち抜き、それから、朝鮮戦争を現に戦っているアメリカの安全保障の根幹をなす組織であって、その組織のど真ん中に共産主義者がいるとやってしまったのです。つまり「聖域」に触れてしまったわけですね。トラの尾っぽを踏んでしまったわけです。それでマッカーシーはテレビで陸軍の弁護士と聴聞会で1対1で対峙して、徹底的に暴露されて、そこから失墜が始まります。1954年の12月の話ですけども、そこからマッカーシーが亡くなるまで3年弱です。マッカーシーは最後はア

ル中で肝臓をこわして亡くなるという、悲劇的な生涯を送るわけです。

このマッカーシーをどう考えるかというのが、大体1970年ぐらいまでの保守とリベラルの問題の非常に大きなかぎになったということです。

ここに、保守の系譜を見ると、アイゼンハワーもニクソンもゴールドウォーターも、もちろんレーガンも、皆、反共主義者です。反共主義者という点ではマッカーシーと選ぶところはないですね。

「バイタルセンター」の思想

さらにいえば、それでは、資料6のモデルに書かれている「リベラル」というのは果たしてどういう立場をとっていたかということ、彼らもやはり反共主義だったわけです。つまり、6-2をごらんいただきたいのですが、当時、第2次世界大戦が終わった後に、民主党の主流がみずからバイタルセンター(Vital Center)というふう位置づけをします。つまり、バイタルセンターというのは、第2次世界大戦前の右翼の全体主義と、それから、第2次大戦後、現にアメリカが対峙している左翼の全体主義、この2つの全体主義というのは、自由で民主的な政治体制にとって常に脅威であるという姿勢です。アメリカは幸いなことにこの2つの勢力は非常に弱い。だから、右翼を右に置き、左翼を左に置いて、そして、政治体制の根幹を占めるバイタルなセンターを我々は占めるのだというのが、ニューディールを引き継いだ戦後主流民主党の一貫した路線です。実際にこの当時は、このバイタルセンターの福祉政策と、それから対外政策、安全保障体制に大多数の大衆が賛成をしていたために、民主党の優位というのが政治体制の中でずうっと続いていたということです。

問題は、6-2で点線でかいているのは、これはバイタルセンターが大衆をこういうふうな位置づけにあるだろうとみているということですね。つまり、当事者が自分たちの政治システムを見るときに、どの政治家も政権をとろうとする、あるいは当選しようとするわけですから、自分がアプローチしようとする有権者というのはどの辺に位置しているのかということに常に考えます。ですから、バイタルセン

ターの人間たちは、自分たちこそ政治体制の中核であって、アメリカの最大相対多数の有権者を支持者として持っているというふう考えるわけですから、有権者大衆はこういうふう分布していると考えられるわけですね。

この有権者大衆が政治状況によってどんどんどん動いていくわけですね。ところが、第2次世界大戦後、アメリカの福祉国家路線に対する賛成というのはほとんど圧倒的だったわけです。ですから、保守派と目されたアイゼンハワーでも、それから、当初はマッカーシーと同じように赤狩りの闘士として売り出したニクソンですら、1968年に彼が大統領になるころまでには、少なくとも内政に関しては、皆ニューディール路線であり、再配分路線です。つまり、共和党も民主党も福祉国家路線によって民衆の福祉を保障していくという路線をとったわけです。それがこのバイタルセンター論です。

それではマッカーシーはこういうふうにみていたかということ、マッカーシーにとっての一番重要なポイントは共産主義かどうかだけです。そして、6-3のように「反共保守」というふうみずから位置づけて、その外に共産主義者とリベラルがいるというわけです。この場合の「リベラル」は、共産主義者の「フェロートラベラー」とか「同伴者」というふうにいわれる位置づけをされていたわけですね。

ですから、リベラルと共産主義者というのは、マッカーシーからみるとほとんど同じに見えるという話です。そうすると、共産主義者というのは非常に大きな勢力に見えてくるわけです。当時のアメリカには共産党というのは殆どないわけです。共産党が一番強かったのは1930年代の大恐慌のときで、党員数が約10万ですね。10万ということは、日系移民の数と大体同じです。非常に弱い勢力であり、戦争直後ぐらいからソビエトとアメリカの対立が深まってきたときにほとんど壊滅的な状況になって、公称で2~3万ですよね。実際には1万程度の勢力しかなくなった時期です。それにもかかわらず、マッカーシーは、政府全部が共産主義者だらけだという宣伝をやったわけですね。陸軍から大統領までがピンクであるという言い方で攻撃をしたわけです。

リベラルのマッカーシー論

この反共保守をリベラルはどう考えていたか？アメリカのような民主的で、極端な政治勢力が右にも左にもなかった社会において、なぜマッカーシーのような人間が出てきて、マッカーシズムというような風潮が世の中を覆うことになったのか？というのが、当時のリベラルにとっても非常に大きな問題になるわけですね。

ルイス・ハーツも含めた歴史家は、マッカーシーが非常にパラノイックであると考えたわけです。つまり、精神的に病的な人間であるというふうに考えたわけです。したがって、リベラルの人がマッカーシーの時代を書くときに、「恐怖」だとか「非理性」だとか「パラノイア」という言葉で表現するのは、そうでもしないと、アメリカの中にそういう極端な政治が現れてくるということが理解できなかったわけです。そして、マッカーシーが、政治的に死んだだけではなくて、実際に死んでしまうと、「あれは一時的な現象だったのだ」とリベラルは思えるわけです。つまり、マッカーシーという個人のデマゴギーな才能と、それから、彼のある種の非理性的な極端主義とが、彼のようなデマゴギーに対する人気を集めたのだというわけです。

もちろん、この当時、非常に大きな責任はマスコミにありまして、マスコミが非常にマッカーシーをはやし立てたわけですね。つまり、必ずしも賛成はしないけれども、はやし立てたわけです。いってみれば、亀田兄弟をマスコミがはやし立てたみたいなので、そういうことをマッカーシーという政治家についてアメリカのメディアはやってしまいます。ですから、マッカーシーが鎮静した後、日本の戦前のメディアについてのある種の贖罪感がいまでもメディアの中に残っているのと同じように、あのときに新聞・テレビは大変な間違いをしたということから、ジャーナリズムの質を問い直すというのは、60～70年代にかけてメディア研究の中にも非常にたくさん出てきます。

マッカーシズムは病理現象

いずれにしろ、そういう問題を残しながらマッカ

シーが衰退していったのですけれども、私はこれを「病理現象」というふうに見ています。「病理」というのは何かというと、アメリカのリベラルの根本的な物の考え方として、「アメリカの政治というのはずうっと近代主義的に行われてきた。例えば立憲制、討論、議会制、選挙等々、これらはすべて、情報を合理的な近代人が理性によってそしゃくをして、それによって投票行動を決めていく」という前提があります。アメリカはそういう制度を200年以上にわたってとっている。アメリカの憲法は世界最古の成文憲法ですし、あの憲法の骨格は、27条のアmendメントを除けば、ほとんどそのまま残っているわけですね。だとすると、ああいう制度が残っているところで、マッカーシズムのようなものは本当は現れないのだ。現れたのは、これは異常だったからだ。極端な人間が1人あらわれて、たまたま転換期にあったメディアを利用し、転換期にあった政治情勢を利用して、民衆の心をとらえたにすぎないのだという考え方が非常に強くあったわけです。

マッカーシーがいなくなった後に、リベラルはある種の安心感を持ったと思います。つまり、ああいう人物にさえ気をつけておけば、アメリカの政治体制が間違うことはないだろうというのが、60年代前後のリベラルの考え方であって、それをまさに実証したと彼らにとって思えたのが1964年の大統領選挙だったわけです。

このとき、共和党から大統領候補に選ばれたのは、バリー・ゴールドウォーターというアリゾナ州出身の当時は極右といわれていた人です。つまり、共和党という2大政党の1つが、バイタルセンターからさらに右へ動いて、非常に右翼的な候補を担いだわけです。ゴールドウォーターは、このときに、ケネディが暗殺された後に副大統領から大統領職を継承したジョンソンに圧倒的に負けます。ニューディールのときの最初のフランクリン・ルーズベルトの勝利ぐらい、圧倒的に共和党が負けたわけです。この圧勝、地滑り的な勝利によって、マッカーシーのような人間はもう二度とアメリカでは政権を得ることはないだろう、あるいは、巨大な政治勢力を得ることはないだろうという安心感がリベラルの間に出た

わけです。

南部民主党と共和党の「保守連合」

この1964年の選挙では、実は非常に大きな変化があったわけです。共和党の中にアイゼンハワー的な、つまり、バイタルセンターの内側で共和党の政権獲得、政権維持を目指すような勢力があった。

資料2で見ていただくといいのですけども、この勢力配置は、1950年代、民主党リベラルの下にウォールストリート共和党というのがあって、これは共和党のアイゼンハワー派ですね。その下に2本で線を引いてあるのは、つまり、ここに非常に大きな差があって、その下に、やや衰退気味の中西部の共和党とマッカーシーを初めとする右翼がいる。それから、人種差別主義的、白人優位主義的な南部民主党という特異な勢力があるわけです。

当時の議会ではしばしば、メインストリートの共和党と南部の民主党が結んで、ニューディール派に対してある種の抵抗勢力をとっている。これを当時は「保守連合」というふうに呼んでいました。つまり、南部民主党とメインストリートの共和党の連合を保守連合と呼んだのです。この保守連合は、「レーガン連合」とは違って、非常に小さな議席しか持っていないし、地盤も非常に狭かったと思いますけれども、いずれにしろ、ここに一つの、民主党の右翼と結んだ共和党の右派的少数派がいたわけです。

実はこの50年代の最初の二重線から下の部分を非常に活性化したのが、64年のゴールドウォーターの選挙だったわけです。ゴールドウォーターの選挙については、60年の保守派の構成(**資料3**)のほうに移っていただくとわかりやすくなるのですが、この時期までにリベラルは、マッカーシーがいなくなり、ゴールドウォーターを徹底してやっつけたのです。そしてゴールドウォーターの支持を訴えかけたジョン・バーチ・ソサエティーという小さな右翼団体があります。「小さい」といっても、かなりな勢力を60年代に持ちますけれども、このジョン・バーチ・ソサエティーというのは非常に乱暴な団体でして、例えば福祉国家というのは全部巻き戻そうと主張したりしました。つまり、ニューディールとい

うのは全部ゼロからやり直して、もう一度完全な競争社会にしようとして訴えたわけです。それから、南部ではもちろん人種差別主義的なメッセージを飛ばすけれども、対外政策においては最強硬のソ連との対決路線を出してくるのがジョン・バーチ・ソサエティーです。中には核兵器の使用も辞さずというようなことをいう人々もいるような、そういう極右の団体だったのです。

かつてマッカーシーを否定したリベラルの人々は、この団体を中心に60年代の共和党右派を「極右勢力」として退けたわけです。ですから60年代のマッカーシー分析の図式をそのまま64年のゴールドウォーター勢力の分析に使ったわけです。これは、ご承知のようにダニエル・ベル、リップセット、リースマンのように有名なリベラルな社会学者たちです。この人たちは、当時、民主党の支持者であったわけですが、彼らがゴールドウォーターを「マッカーシーのような極右である」というふうに位置づけたわけです。

ところが、そのように安心し切っているリベラルの足元で、実は少しずつ地殻変動が起こっていたわけです。その1つは黒人問題です。ご承知のように54年のブラウン判決で有名な、「隔離すること自体が違憲」という人種隔離違憲判決が出た後、10年間にわたってアメリカでは人種統合の運動、マーティン・ルーサー・キングの非常に印象に残る演説があったりした時代ですけども、黒人の権利の主張というのがどんどん行われていきます。これは、楽観するリベラルの目から見ると、自分たちの基盤が拡大していく方向というふうに見えるわけなんです。それから、この当時にベトナム戦争が始まります。65年の2月に北爆が始まりますけれども、66、67年あたりから非常に泥沼化の様相を呈してきます。

そういう60年代の中ごろ以降、果たして共和党の中の右派と目されたゴールドウォーターに支持を送った人々がマッカーシーのような人たちであったかということ、実はおそらくそうではないのです。つまり、ニューディールというのは、徐々に徐々にいろいろな問題で崩れつつある、あるいはニューディール型の政治システムに陰りがみえつつあるとき

に、ゴールドウォーターは出てきて、非常に極端な形でニューディール体制をひっくり返すと言ったために、反射的にニューディール支持者たちが共和党の内部からも反乱をして民主党に票を投じるというようなことがあったわけです。だからこのランドスライドというのは、ある意味で、ゴールドウォーターという特異な指導者が引き起こした反射みたいなものであって、民衆社会あるいはグラスルーツのリベラルから保守への流れというのを見失わせる結果になったというふうに、最近の歴史家は見ています。

民主党の分裂

したがって、1968年の選挙のときに起こったことは、前回、地滑り的な勝利を得たはずの民主党が、ここでは四分五裂状態に陥って、つまり、ニューディール派が戦争と公民権と福祉国家をめぐる3つにも4つにも割れた選挙になったのです。あの選挙の最中にキング牧師が暗殺され、それから、ケネディの弟、ボビー・ケネディが暗殺されたわけですね。そして、民主党ではユージン・マッカーシーという非常にリベラルな候補者が登場して、ハンフリーと最後まで大統領候補の座を争って、結局、ハンフリーが副大統領として大統領の選挙に出ますけれども、そこでニクソンに負けるわけですね。

つまり、この過程をみると、わずか4年の間にあたたかもニューディール連合がガラガラと崩れたように見えるのですけれども、実はもう60年代の初めごろから、ニューディールの経済政策が行き詰まれば何が起こるか分からない状態にはあったといっていいたいと思います。60年代の前半、経済がニューエコノミーのもとで非常に好調だったということもあって、その点もニューディール連合の解体を隠したと思います。

ところが、結局、ニューディール連合を起点とする2つの戦争、つまり、ベトナム戦争と「貧困との戦争」においてリベラリズムが失敗していくのですが、それは経済から失敗していきます。そこで財政赤字という新しい問題が出てくる。それから、戦争が続いているので、インフレーションが高進する。しかも、経済がこの当時、日本やヨーロッパの追い上げ

もあって、日本の人々を驚かせたドルショックも含めたニクソンの新経済政策というのが出される。ともかく、その過程でアメリカの経済がガタガタになっていきます。したがって、70年代は停滞の時期、成長率の鈍化の時期であったということが出来ます。

結局、ニューディールの福祉政策をジョンソンが「偉大なる社会計画」という計画の名のもとに拡大したのですが、それが完成した瞬間に財源がなくなったわけです。財源がなくなったことによって、実はリベラル派はかなり支持を失っていたわけです。ところが、ここでまたいろいろな混乱要因が起きます。つまり、ウォーターゲート事件ですね。ウォーターゲートというのは、いままで政治学者を非常に悩ませていたわけです。つまり民主党が勝つはずのない1976年選挙で民主党が勝ったのは、ウォーターゲートがあったからですね。しかも、あのときの民主党の大統領はカーターでしょう。カーターは全くの無名の人であって、ワシントンでほとんど勢力のない人だったのです。この人が大統領になることによって、民主党の没落はさらに隠されたわけです。それが決定的に明らかになったのが1980年の選挙だったわけですね。

南部の2党化

その間のことを詳しく話している時間はありませんので省略しますが、2つだけ非常に大きな点を挙げておきます。これはグラスルーツでの動きです。1つは、南部というのは、リンカーン以来、何があっても反リンカーンで来たわけですから、反共和党でやってきたわけですが、この南部で初めて共和党が有力な対抗政党として民主党と南部を2党化するに至ったのが60年代です。先ほどいったように、ゴールドウォーターは、1964年選挙で圧倒的に負けますけれども、このときにゴールドウォーターがわずかにとったのが、自分の出身州のアリゾナと南部の4州です。これは深南部で、一番人種差別主義的なところですよ。

ゴールドウォーターの名誉のために言っておくと、ゴールドウォーターは決して人種差別主義的な人ではありません。ただし、ゴールドウォーターは南部

をとるためにどういうことをやったかという、要するに「ステートライツ」ということを言ったわけです。ステートライツというのは、要するに連邦主義であって、州はかなりのことを自由に決められるということです。これは昔の18～19世紀的な分権主義を言ったわけです。南部で特にそれを言ったわけです。南部の人間たちはそれをどのように受け取ったかという、人種隔離を続けても、ゴールドウォーターが大統領になっていけば、それは許されるというメッセージとして受け取ったわけです。したがって、このときに南部は初めて共和党に投票したわけです。

68年のときは、それを受けて、民主党の中から人種差別主義者のジョージ・ウォレスという人が出てきた。彼は民主党を割って独立政党をつくって、南部の中央部を獲得します。つまり、64年と68年の2回にわたって、民主党主流派、ニューディール連合から、南部は離脱したわけです。

これ以後、南部は、選挙ごとに、だれが出るかによって全くわからない候補地になります。76年のときにはカーターがジョージアという南部出身の大統領だったために、南部は再び民主党に戻ってきますけれども、80年になると、カーターがとれたのは自分の出身州だけで、ほかの南部はみんなレーガンに行ってしまう。というふうに、南部が2党化した。南部が共和党優勢地域に転換したというのが、このときの非常に大きな変化です。

それから、もう一つは、民主党リベラルの牙城が都市に限定されてきたということです。どういうことかという、都市の周辺の郊外地域に人口がかなり移っていったということです。アメリカのセンサスで幾つか記憶すべきセンサスがあります。1つは、1890年のフロンティアがなくなったという有名なやつですね。2つ目は、1920年で、都市人口が農村人口を上回ったセンサスです。

それから3つ目があって、1990年のセンサスで、サブバブの人口が都市中心部の人口を上回ったということが、と私は考えています。つまり、人口移動がこのときに始まっているわけです。このサブバブと、それから南部の変化、これと重なって

いるのは、サンベルトへの産業構造の中心の移動です。サンベルトがこの時期に非常に豊かな地域になって、新卒のエリート学生がみんな南西部、カリフォルニアからアリゾナ、ニューメキシコ、テキサスといった地域にどンドンどンドン流れていきます。したがって、北西部、東北部の工業地帯というのは人口がどンドン減ってくるわけですね。人口が減ってくると、当然のことながら大統領選挙のときの選挙人数に影響してきますから、テキサスやカリフォルニアは大統領選挙の帰趨を決めるのに非常に重要な州になっていきます。

「グラスルーツの保守」

実はこの時代に、あまり注目されない中で新しい保守主義が生まれてきています。これはいろいろな言い方をします。「運動保守」という言い方もあるし、「グラスルーツの保守」という言い方をしたりします。要するにリベラルが、保守というものを「風変わりな珍奇な知識人の運動」とか「ほとんど狂気に陥ったような政治家」などというふうに考えているうちに、実はニューディール体制に飽き足らない中産階級の子供たちが、都市においても大学においても、右派的な学生運動に参加し始めるのがこの時期なのです。彼らはサブバブに出かけて行って、共和党の投票勧誘の先兵を務めるようになる。つまり共和党の組織が下から民主化され、活性化されてきたわけですね。

結局、そういう新しい保守主義の人々は、1930年代以降の「ニューディール・コアリション」と同じで、例えばリベラルの人たちが極右の人たちをみたように、「イデオロギー的に一貫して狂った人たち」という見方ではくくれないのです。だから、政治的なコアリションで大事なものは、部分的な要求を持ち、それと対立する要求を持つ人たちを同じ陣営の中に入れるということが、コアリションを大きくしていくための条件なわけです。

ですから70年代の新保守主義には一応三つの側面があると思うのです。第一に「反共主義」ですね。まだ冷戦があります。外交における反共主義ということです。第二が「反福祉国家」です。アフターマティブ・アクションが中産階級を郊外に追いやってい

く時代で、それに対する反対論がある。あるいは過剰な福祉路線に対する反対、高い税金に対する反射的な反対もあるし、市場主義への回顧といったような問題ですね。そして三つ目に「道徳的・宗教的保守」がある。日本でもそうでしたけれども、60年代末から大学が荒れ、若者が親の権威に反抗し、いろいろな性的な行動とか麻薬といったようなかなり放らつた「文化的リベラリズム」が享受されているという状況の中で、それを戒める動きが民衆の中から出てくる。

リベラルが、保守というのは偏奇なイデオロギーだといっていた時期に、それでは、当時のニューディールを支持した人たちに「人工妊娠中絶に賛成ですか、反対ですか？」と聞けば、ほとんどのリベラルは「私は反対です」というふうに言っただろう。

「麻薬に賛成ですか？」というのと、「とんでもない。徹底的に取り締まるべきだ」と言っただろう。

ですから、そういう意味では、このときに表に出てくる感情というのは、50年代の政治体制の時代からずうっとアメリカのグラスルーツに底流としてあった倫理観であり、世界観であり、経済観であったというふうに、いまから思うと考えられるわけです。そのことが最初からわかっていれば、そういう人がどういう投票行動をとるのかということの説明する原理というの、もう少し複雑になってきただろう。これは、政治学者、政治史学者としての反省を込めて、そういうふうに見えるだろうと思うわけです。

このときに、大学で騒いでいる学生に対して、共和党的人々が「自分たちはもう少し落ちついたアメリカを求めると言うことは、全然偏奇でも、おかしくもないですよ。そういう人たちが、「私は地道に人々の間を回って政治活動します」という活動をすることは、別に悪いことではない。

<春海より：話し言葉では下記のようになっています。少し分かりにくいと思ったので、上のように変えました。よろしいですか？>

~~共和党的の、先ほどいったような、つまり大学で騒いでいる学生に対して、自分たちはもう少し落ちついたアメリカを求める。これは全然偏奇でも、おか~~

~~しくもないですよ。そういう人たちが、「私は地道に人々の間を回って政治活動します」という活動をすることは、別に悪いことではない。~~

そういう下からの積み重ねのようなものが、共和党は64年、68年で非常に勢いづいていますから、「南部戦略」をうえから推し進めます。南部に徹底していい候補を立て、資金的にもその候補を優遇するというようなやり方で、南部戦略を立てるわけです。それに呼応するように、保守的な思考を持った学生や若者たちが、下からの運動を盛り上げていく。これが、当時の新しいメディア、つまりダイレクトメールと、やがて出てくるコンピュータのような新しい戦略によって、保守的なメッセージというのがかなり緻密に、レーガンが登場する15～16年の間にグラスルーツの保守的な民衆の間に届けられていたということを、注目しなければいけないだろうと思います。

レーガンの保守連合

したがって、レーガンが保守連合をつくったとき、レーガンのスローガンは「強いアメリカ、豊かなアメリカ、正しいアメリカ」だったのです。当時、私も人並みにリベラルでしたから、我々は「レーガン・中曽根・全斗煥」などと言っていたわけですね。世の中は、とんでもなく右傾化して全体主義の状態が世界中に来るのではないかと本当に恐れていたわけです。

ところが「強いアメリカ、豊かなアメリカ、正しいアメリカ」というのは、少し幅を広げてみれば、民衆的な心情としては50年代から冷戦期も、豊かに暮らしている民衆、中産階級からみたら、同じようなことを考えていたわけですね。何の変化もないわけです。ただ、生活上の問題で福祉国家という国家の強権を発動しなければ維持できない政治体制を、たまたま彼らは選挙の中で支持していただけであって、それが崩れてしまえば、また自分たちの最も根本的な信条、原理というものを評価してくれる人に支持を変えていくというのは当然のことであるわけです。

私は、レーガンというのは一番わからなかったで

すね。1980年にレーガンが出てきたとき、アメリカはどうなってしまうのだろう、マッカーシーみたいな人間がこれからアメリカを引っ張っていった大変なことになるというふうにずうっと思っていました。

1984年の選挙のとき、私はたまたまアメリカにいて選挙を見ていたのですが、民主党の候補者はモンデルでした。あのときに初めて女性の副大統領候補(ジェラルディン・フェラーロというイタリア系の女性)が出て、民主党は歴史に残る大惨敗を喫したのです。しかしあのときの民主党大会は非常に気持ちのいい党大会でした。コモ、ジェシー・ジャクソン、エドワード・ケネディ、モンデルらが大演説をやった。もう指折りの人たちが非常に感動的な演説をやって、党大会だけは非常に盛り上がった選挙だった。

しかし選挙が終わってみたら、「グッド・モーニング・アメリカ」といったのはレーガンだったわけですね。レーガンはあの圧勝で「アメリカは完全に変わった」「長い夜が完全に終わった」と宣言したわけです。まさに「グッドモーニング」ですね。あのレーガンの時代の最盛期、民主党のリベラル派は最後のお祭りをやって消えてしまったのだ、というふうに、今度は共和党の人たちが考えたのだらうと思うのです。それがレーガンの高揚した「グッド・モーニング・アメリカ」になって、それから2年後にはレーガンはほとんどもうろくして大統領を去りました。ともかく、このレーガンの2期が、現在、共和党が夢みている「コアリション(連合)」です。

「ブッシュ連合」とレーガンの違い

そこで考えておかなければいけないのは、現在のブッシュ連合とレーガンとはどう違うのだろうかということですね。

ブッシュ連合がイラク戦争でここまで崩れるということは、おそらく想定されていなかったと思うのです。2003年の5月、空母の上に軍服を着て飛び降りるというおちょこちょいなことをやったときに、ブッシュは84年のレーガンと同じような高揚感があったのだと思います。つまり「ブッシュ路

線」がここで完全に定着したと確信したのだと思います。ところが、実際には、このブッシュ政権下でとんでもないことが幾つか起こっています。そして、いわばこの7年間で、ブッシュはレーガン保守連合の遺産をかなり食いつぶしたのではないかと私は思っています。

一つは財政の問題です。レーガンのときもレーガンを最も悩ませた双子の赤字(財政赤字と貿易赤字)です。なぜレーガンはそれに悩まされたかかというと、レーガン軍拡が非常に大きかったからです。レーガン軍拡のおかげで、アメリカの経済体質は、政府も民間も借金体質になった。これを、冷戦が終わったことによって、非常に不運なブッシュのお父さんの後に、非常に幸運なクリントンが2期で財政を完全に立て直したわけです。ところがその後、2001年からまた大戦争を始めるということをやります。それから、レーガン流の徹底した富裕者優遇税制を遂行した結果、いまアメリカ政府は、レーガン時代を超える財政赤字を抱えているということです。

それから、もう一つは中国の追い上げがあります。かつての日欧の追い上げのときのニクソンのように、アメリカの貿易赤字は非常に増大している。そして、ファイナンスするために、物すごくアメリカの国債を外国に積んでしまっているわけですね。

クリントンの成功がブッシュの放漫財政を生む

こういう状態の中で、どこまでドルが信任されていくかという問題が残っている。その意味でブッシュはレーガン政権のときの経済政策を非常に純化された形でやってしまったのではないだろうか。そしてそれをやらせたのは何かというと、クリントン政権のときの成功だったわけですね。つまりクリントン政権があそこまで見事に財政赤字をなくしていなければ、あるいはクリントン政権の時代のITバブルがなければ、おそらくブッシュはここまで放漫な財政をやらなかったらと思うし、それから、戦争をどこまでも続けるという路線をとれたかどうかというのは分からないのです。

ブッシュのやっていることは、その意味では「純化されたレーガニズム」と言えるわけです。ただし、ブ

ブッシュとレーガンの大きな違いは、レーガンにとってはあくまでもまだ「残存するリベラル勢力」というのがあったわけですね。ですから、人々に訴えるときでも、それから、対抗的な政策を立てるときでも、労働組合と民主党の左派、あるいはリベラルの存在を無視するわけにはいかなかったわけです。ですから、そういう意味ではレーガンは、「イデオロギー的」というよりは極めて「プラグマチック」で、実際的なリーダーシップを振るった大統領であったというふうに考えたほうがいいだろうと私は思います。

「レーガン保守連合」のイメージは図6-5に示されていますが、「福音派キリスト教徒」は人口でいえばかなりな部分(3割~4割)を占めるぐらいまで来ているのではないかと思います。それから、「リバタリアン」というのは、自由放任主義、市場万能主義です。それから「ネオコン」です。こういう幾つかの保守的な考え方は、必ずしも三者がすべての点について一致しているわけではないし、内部分裂は不可避なのですが、にもかかわらず、多様な勢力を非常にふわっと包み込むリーダーシップがレーガンの持ち味だったのではないかと思います。

ネオコンの台頭と凋落

このレーガン保守連合の中から、おそらく次の政権で完全に落ちるのはネオコンだろうと思います。マッカーシーを恐れ、マッカーシーからは、あれは保守的な顔をしているけれども、保守じゃないと言われた人たちが、最初はネオコンといわれたのです。つまりリベラルの内側からマッカーシーを「間違ったえせ保守主義者」「疑似的な保守主義」と呼んだベル、ホフスタッター、ハーツのような人たちが「ネオコンサバティブ」だったわけです。

ご承知のように、70年代のネオコンサバティブというのは、ベトナム戦争であまりにも負けたために、孤立主義にも陥りかねない弱腰の民主党外交にしびれを切らした民主党の中の対外強硬派と言われる人々であって、この人たちがネオコンに転じていくわけです。レーガン政権で国連大使をやったカーク・パトリック女史のような人たちです。それからノーマン・ポドレッツというような人ですね。この

人たちはもともと民主党の支持者だったのけれども、70年代の外交政策を通して共和党にいらがえした人たちです。この人たちが、80年代はある意味でレーガンの羽のもとで強硬路線を推進していった。彼らは、1989年の冷戦の終結と91年のソビエトの崩壊で最も自分たちの路線の正しさを確信した人たちです。この人たちが「ネオコン」というふうにいわれる人たちです。

前の、つまりマッカーシー批判をしたネオコンたちの一部は、このネオコンに流れ込んでいますし、ニューディールの福祉路線を批判した、内政におけるネオコンの一部もここに入り込んでくるわけです。ですから、保守主義者の知識人集団としては、90年代にネオコンは頂点を迎えます。

しかしこのネオコンが、クリントン政権の内外政策に対して非常にいら立ちを強めて、いろいろな組織を作り、内政・外交において最も彼らの政策を忠実に実行しそうなブッシュの支持に向かうわけです。ブッシュが2000年に当選したときに、彼らの多くが政権に入ったのはご承知のとおりだと思います。そして、そこでやってきたわけですが、何といても圧倒的にイラク戦争についての見込みというのが問題であって、結局、去年の中間選挙はブッシュに対する新しい通信簿だったという面があります。その中の最大の敗者はラムズフェルドだったわけです。そのラムズフェルドが辞めたことで、イラク戦争に一つの転機が訪れたというふうにだれもが思ったわけです。

ラムズフェルドの失敗

それは何かというと、ラムズフェルドは結局、イラクをネオコンの路線に従って民主化するという言い方をしたわけですね。ところが、ラムズフェルド戦略というのはそれと矛盾しているわけです。なぜ矛盾しているかということ、ラムズフェルド戦略というのは、新しい軍事技術によって戦闘にあつという間に勝つということに力を入れた戦略であって、実際には兵士を殺さない戦争です。パウエルという軍人上がりの人と一番違うのはそこだったわけです。パウエルはむしろ、戦争を勝つためだけではなくて

勝ち切るためには、やはり人員が必要だということ
を繰り返し言った人です。参謀総長をやった人だから、当然そうだけれども。彼の路線が入れられなくて、結局、イラク戦争を最後までラムズフェルド
戦略で乗り切ろうとしたのはブッシュで、ここで失敗したというのは非常に大きい。

ラムズフェルドが交代した結果、直ちに起こってきたのがイラク・スタディー・グループ (Iraq Study Group: ISG) です。つまりブッシュのお父さんのときの政策ブレンが、いま戻ってきつつあるのです。彼らは、ともかくこの戦争はアメリカが徐々に手を引く以外にないという路線を、超党派的に初めて共和党の内側から言ったわけです。ブッシュのおじさんのような人たちが「ちょっともうやめようよ」ということを言ったわけです。このISGの路線は、去年の中間選挙に非常に打撃があるというので、その打撃を避けるためにわざわざ選挙の後に発表するということまでやったのですが、それでもラムズフェルド戦略の欠陥というのは民衆の目にも明らかであって、結局、去年の中間選挙というのは、「イラク・ラムズフェルド選挙」だったというふうには私に思っています。結局、ブッシュも徐々にISGの路線に近づいていくだろうというふうには言われています。

ヒラリーの「路線転換」?

そこで民主党ですけれども、ヒラリー・クリントンとバラク・オバマの間でさや当てがありました。最近ではクリントンが、「2003年に参戦するときに賛成したことは間違いではなかった」というふうに路線転換をしたと思います。その後の展開が悪かったのだというわけです。つまり、ある意味では間接的に安保問題におけるリーダーシップ論をやっているのです。つまり、「ブッシュだから失敗した」と言っているわけです。

それでは、ヒラリー・クリントンが大統領になったときにどういう路線をとるか?これは、私が予告をすると大概外れますので何にも言いません。皆様のほうがご存じだろうと思いますので、後でご意見をいただければと思います。

もう一つ、最後に言っておきたいことは、やはり

基本的にはアメリカの政治のシステムというのは、この図6-1のモデルで考えていくのが一番真っ当なのではないかということです。「保守」と「リベラル」の間に、状況によって丸に若干大きさの差ができてくると、それに対応して政党が政策を変えていくということをして、戦後ずっと繰り返してきた。だから、いまリベラルが保守にかわって政権をとったとしても、ある程度保守の支持基盤というものに妥協的な政策をとるのではないかと思います。選挙に勝つために必要だということもありますが、それだけではなくて、大統領になったときに一番求められるのは妥協であり、調整であり、それから、いろいろな勢力間の交渉ですね。その余地をなくすような大統領は、いままでアメリカの大統領の中で一度も選挙に勝ったことがないということだけは明記しておいたほうがいいだろうと思うのです。

質疑応答

ワダ (個人会員) アメリカの政治には共和党、民主党、保守、リベラル等々いろいろあるが、それらを分けるキーポイントは、社会保障、イラク、サブプライムというようなことではなくて、「倫理(ethic)」や「宗教(religion)」だという人がいます。堕胎の問題とか毎週教会に行くかというようなことで立場が分かれて、投票者の行動も分かれるのがアメリカの政治ではないかということです。そういう見解に対して先生はどう思われますか?あるいは先生にとって、アメリカをとらえるキーワードのようなものがあればお教えいただきたいのですが……。

古矢 日本において宗教で人が分かれるより、religionがアメリカで人をはっきり分けるのは事実だと思います。例えば、アメリカの宗教を考えるとときに教派(デノミネーション)という問題が一番わからない。あるいはヨーロッパ人がアメリカの宗教をみてもわからないのはデノミネーションというレベルでの宗教の違いかもしれません。アメリカは国教を持たなかった国です。つまり、アメリカにやってくる宗教集団は、自分たちの教派を荒野に出かけてい

って勝手に開くことができたわけです。ですから、アメリカのキリスト教の特色ということキリスト教者がいうときに、いつも出てくるのは、「デノミネーションナリズム」と「プルーラリズム」(教派が多元的に共存する宗教システム)であるというふうなわけですね。

時代状況によって、デノミネーションがどんどんどんどん西部のほうにも展開していった、あれだけ多様なキリスト教者が、お互い宗教戦争をやらずに暮らしているというのは、ヨーロッパや同じキリスト教地域からみてもわからないところなのではないかと思うのです。ヨーロッパでは、宗教で物すごい数の人が死んでいるのですからね。

つまり、そのデノミネーションナリズムとプルーラリズムがアメリカの宗教界に広がっているということ考えると、デノミネーションの相互の違いというのは非常に意識しているのだけれども、それでは、それが何か政治的に直ちに非常にくっきりした境界線を結んでいるかということ、余りないのですね。例えば昔、カトリックが排斥されていた時代は、「カトリック問題」というのがあって、カトリックに投票するか否かで政治が分かれていた時代がありました。しかし今はそうではない。伝統的にいいますと、**図6-5**にある「福音派キリスト教徒」が共和党の保守連合の中に入ってくるのは1970年代の後半です。このころ、ジェリー・ハウエルというような人が、「モラル・マジョリティー」という有名な党派をつくって、これがレーガン政権の一つの柱になります。それから、パット・ロバートソンのような右派キリスト教徒も共和党に入ってきます。

しかし例えば「福音派キリスト教徒」というのを広く解釈してビリー・グラハムのような人まで考えると、彼などは50年代ぐらいから非常に広く訴えかけて、政治家の中にもかなり彼に帰依した人というのは多い。いまのブッシュに至るまで、そういうことをいうわけですから。

この福音派キリスト教徒は、ここではたまたまレーガン保守連合に入れてはいますが、「福音派」といっても、ファンダメンタリストから、もっと緩やかな信仰・信条の人までかなり幅があります。「労働組

合」や「リベラル」のところに点線をひっかけてあるのは、そういう意味を持たせたつもりなのです。ですから、非常に極端なファンダメンタリズムを主張するような人は、おそらく民主党にはいないと言えると思いますが、一般に宗教をみれば党派がわかるというほど、はっきりした違いを宗教は生み出していないのではないかと思います。

個別具体的にいえば、あらゆるものが政治の世界では正規分布しているというふうな考えたほうがいいと思うのです。例えば人工妊娠中絶についても、医者をしてでも人工妊娠中絶に反対だという人は極端だと思うのですよ。一方、人工妊娠中絶は権利としていくらかでも認められるべきだということもまた極端な話です。意見というのは大体真ん中ぐらいに集まってくるんじゃないですか。「私はどちらかということ、人工妊娠中絶は法令で取り締まったほうがいいと思う」というのと「いや、私は自由に任せたほうがいいと思う」というのでは、それほど幅のある話ではない。その問題だけで党派が分かれるかというと、そうではなくて、非常に極端な議論をする人たちは、反対であれば共和党に入る。しかし非常に極端な解放派、自由化論者がいるとすれば、それは民主党に入るというような意味での分裂はあると思うのですが、それで全体の動向がはかれるかというと、私はちょっと疑問だと思っています。

タカハタ(産経新聞) 私は、共和党保守の中で、新保守主義(いわゆるネオコン)がアメリカの保守に与えた影響について勉強しています。ネオコン前の共和党の外交は、キッシンジャーに代表されるように、勢力均衡のリアリズムということで、外交にモラルや道義を持ち込まずに、下手なけんかはしないし、強いところとはうまくやっていくというようなところがある。新保守主義は冷戦時代にそれを批判したという経過があると思います。

来年の大統領選ということで考えますと、いま、いわれているのは、共和党のジュリアーニ陣営にポドレッツのようなネオコンが入っていった、「イランを叩け」というような主張をしている。それがどうなるかというのが話題を呼んでいます。

一方の民主党の有力候補になっているヒラリーさんのほうも、オバマとはちょっと違って、例えばイランについてどういうことを書いているかを見ると、「簡単に戦争をするわけではないけれども、武力行使はオプションとして残しておく」というようなことを言っていて、外交から、「道義性」や「道徳性」のようなものを完全に排除するわけではない。だからと言ってすぐネオコンに結びつけるという意味ではないのですが…。

共和党政権になるか、民主党政権になるかは別として、ブッシュ以降の次のアメリカの外交が、ISGグループが提唱したような「リアリズム外交」の方向へ戻っていくのか？ 共和党になるのが、民主党になるのが、そういう方向性をとっていくのか？ それとも、逆に新保守主義が掲げたように、外交にある程度道義性とかモラルとかいうものを取り込んで流れていくということなのか？ どちらになるのかというのを、あるいは、どの程度どうなるのかというように教えていただければと思います。

また、アメリカの外交の大きな特徴として、ヨーロッパの外交と違って、道義性みたいなものがかなり強いということがあると思います。その背景に、アメリカの宗教保守だとか、宗教心が厚いとか、そういう特徴もあると思うのですが、そんな面からもコメントをいただければと思います。

古矢 歴史をやっているから癖になっているのかもしれないですが、これからどうなるかということを考えるときに、私は殆ど反射的に、前にどういうことがあったか、それから、これについてはサイクルがないかということを考えるのです。

やはり1つは、イラク戦争の経験はかなり引きずるだろうなという感じがするのです。ただ、ベトナム戦争の経験を引きずったほどには引きずらないかもしれない。というのは、ベトナム戦争のときは、徴兵制でしたから、若い知識人や知識人候補になるような学生たちが、相当この戦争に引っ張っていかれて現場を見ている。あるいは相当数の知識人候補たちが死んでいるという問題があります。

ベトナム戦争についていうと、ポドレッツが、1982

年に、「ベトナム戦争は正しかった」と書きましたね。あのポドレッツの議論というのは、ある意味で、あの時代に死んでいった知識人候補に対するオマージュだったという感じもするのです。そのようなことを言う人は余りいないのですが、「あの戦争は無駄ではなかった」と言うときに、それは必ずしも右派的に強硬路線をもう一回取り戻そうという意味ではなくて、そういう言い方によって、ポドレッツは、「あの戦争の評価すべき点というのをもう一回考え直したほうがいいんじゃないか」と言ったわけです。

そのすぐ後に冷戦が終わって、冷戦に勝ってしまったものですから、その議論がなかなか深刻なものとして繰り返されなかったという問題があると思うのです。もしソビエトがずうっと続いて、冷戦がずうっと続いていると、ベトナム戦争の議論というのはいっとも続いたし、深まったのではないかと思うのです。何となく勝利言説みたいなものの中にベトナムの反省というのが入って行ってしまったようなところがあって、ポドレッツの発言が持っていたかもしれない深みというのでもそこで失われてしまったというふうに私は思うのです。とにかくベトナム戦争については、外交の担当者も社会の知識人もかなり深刻に悩む時期があったのだらうと思います。

ただし、今度のイラク戦争の場合は、徴兵制でやられておらず、傭兵と貧困層の若者が主戦力になっているわけですね。貧困層の若者の場合、少なくとも自分の意識としては、一等市民になるために軍隊に入ったというような人たちです。それから傭兵は、お金で雇われた兵隊ですよ。戦争が長引いているということをみんな心配しているように見えながら、大きな反戦運動が起こらない一つの原因として、このような人々が兵隊になっているということがあるわけです。

それから、この戦争が終わっても、エリート層は余り打撃を受けてないですから、余り長く外交に響いてくるような経験ではないのかもしれないという疑いもあるんですね。これは分かりません。ただ、ベトナム戦争と比べると、戦争の内実というか、戦争を戦った人たちの層がかなり違うので、その問題は多分後まで残るだらうと思います。

いま、ヒラリーが、「直ちに戦争をやめたほうがいい」と言わないのは、おそらくそういう雰囲気アメリカの中にはないんですね。つまり、アメリカの中産階級にとって、この戦争はそんなに深刻に痛くないということなのです。しかし徐々に徐々に近隣で死んだ兵士の親と慰め合う会がふえたり、徐々に徐々に財政が逼迫してきて税金問題が出てきたり、徐々に徐々に経済が不景気になってくるとか……そういうのと絡めて、イラクが目の上のたんこぶみたくに見えてくるのであって、戦争自体が、社会の中核を占めている中産階級、あるいはアップーミドルクラスの人々にとって、そんなに大きな経験だというふうに思えないのです。

だから、ヒラリーは、「リアリズム外交」ということを言えるし、ジュリアーニも「ゆっくりと足を抜く」というようなことを言っている。ゆっくりでいいし、リアリスティックでいいというのが、いまの候補者のイラクについての共通の立場のような気がするんですね。

その後、強硬にするかどうかというのは、そこから先の話です。「道義」で行くか、「リアリズム」で行くかといったら、当面は「道義」なのではないかと思うのです。つまり、いまの中東の状況を見て、中東の民主化ということを「リアルに」言える人がどれだけいるかという、あんまりいないと思うんですね。中東の民主化というのは、イラク戦争が始まる前だから言えたのであって、民主化が始まってしまうと、その点では私の予測は当たったと思います。私は「混乱のちまたになる」というふうに言ったわけですが、リアリズムで考えていけば、民主化だとか自由化ということを最初に振りかざして外交を展開していこうとする人は、誰が大統領になっても当面はあり得ないと思います。

ただ、細かいいろいろな政策を正当化するときに、「自由」とか「デモクラシー」とかという符牒を振りかざすのは、アメリカの政治家にとっては非常に大事で、国内の説得手段としてはそういう議論は欠かすことはできないだろうと思います。ただ、ネオコンやブッシュはそれらを本当に信じたのではないかと思うのです。けれども、文字どおり世界に民主主義

を、次はここ、次はここというふうに拡大していくような路線をだれかがとるといふには、いまのところは到底思えないですね。

タカハタ（個人会員） リバタリアンの話がありました。アメリカの政治・法思想の中で、リバタリアンへの有力な反対思想としてコミュニタリアニズムがあります。コミュニタリアニズムという思想がこれからのアメリカ政治の中で、どういう役割を果たしているかについて教えてください。

古矢 コミュニタリアニズムとリバタリアニズムという話は、きょうの話との関連でいえば、ニューディール型リベラリズムの衰退局面で出てきた議論なんです。つまり、昔はリバタリアンとリベラルというのは分かれていなかったわけです。少なくともアダム・スミスの時代といえますか、アメリカの建国の時代というのは、中世的な身分制だとか階級制に対する批判で、個人が理性を持って自らの運命を決めていくという、近代化の出発点に出てきたのがリベラルであって、そのリベラルというのはやはり、一人一人の人間がインタレスト(利益)を持っているという話ですよ。一人一人のインタレストを、自分で何がインタレストかを判断し、自分で社会に働きかけ、自分で労働して、自分で自分の身を立てていくことができるというのが、近代的な原則になったわけですね。

それが極端に行くと20世紀の「アトミズム」になる。アトミズムというのは、要するにみんな原子だということです。一人一人が勝手に動く。しかし、見てみると、みんな小粒で、ちょっと政治を右に傾ければ、みんな右に、左へ傾ければ左に行くという、これは全体主義だ。だから、もともとのリベラリズムが、大衆リベラリズムみたいなものになったときに、非常に危険な大衆迎合主義みたいなものが出てくるというのが20世紀の状況ですよ。

そこで、つまりリベラルが、個々人が持っていると言っている利益を、実は個々人の利益だけではなくて、個々人が昔からつくっている伝統的な集団の中にも利益があるという考え方が出てくるんですね。

それがコミュニタリアニズムだと私は思うんですよ。そのときに、リバタリアンの人々は、リベラルが途中でニューディールのような国家を使う反則を行ったために、人々の自由と機会が十全に開かれなくなったのだから、またもとに戻して、国家を完全に市場に従属させるような形で市場主義をもう一度確立することによって、個人個人の行動の自由が出てくるのだというふうに言っているわけですね。

そうすると、要するに国家というコミュニティーを取り込んだことによって失敗したというふうに考えるリバタリアンは、リベラルと真っ向から対立するわけですね。ニューディール政策を挟んで対立するわけです。しかしリベラルの人々が国家を使ったから悪いんで、もう少し「近隣共同体」だとか、「地域共同体」だとか、それから、「リージョン」だとかという、幅のあるいろいろなレベルの人間集団の協力関係みたいなものと、その協力関係の累積みたいなものに頼ることによって、それほど赤裸々な個人間の利益の対立というのはなしに、よりよい社会が築かれるのではないかということを出したわけですね。つまり、リベラリズムの中の利益主義みたいなもの、経済的なインタレストばかりを強調するリベラリズムに対して、いや、それだけがすべてではな

くて、穏やかに暮らすとか、離婚が少ないだとか、みんな神を思い、近隣を思い、要するに自分の周辺にいる人間たちと優しくつき合っていくことができるんだみたいなことを、何となく70年代ごろに社会が荒れている中で、アメリカはもともとそういうのはなかったかねって考え出した人がいるわけですね。

そうすると、アメリカ革命の原理までさかのぼるんですね。アメリカは、いつも建国期までさかのぼってしまうのですが、そこまでさかのぼると、ロックみたいに個人の利益ということでアメリカの体制を正当化したばかりではなく、実はもっとコミュニティーということでアメリカ革命を証明しようとした人がいるのだとか、そういう話が出てくるわけですね。これはアメリカ革命論が70年代に非常に大きく変わったということなのですね。

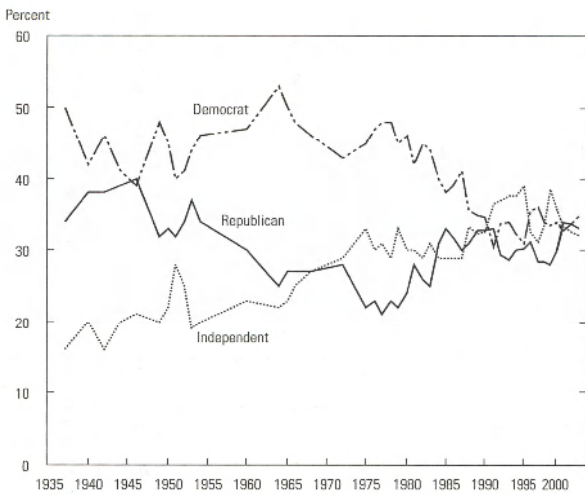
つまり、ニューディール体制が行き詰まるという現状からさかのぼって、アメリカ革命の起源まで議論が及んでいくというのは、歴史家というのは何となく無駄なことをするのだろうかという感じもしないではありません。しかしともかくそういうことの繰り返しを我々はやっているという感じですよ。

文責・編集部

◎資料 1

政党支持・イデオロギー世論調査

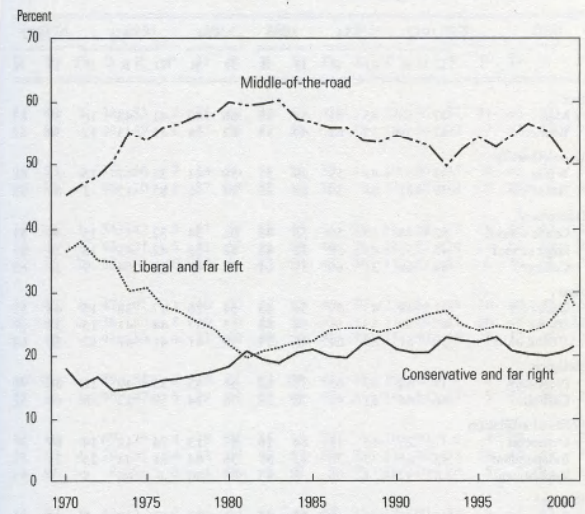
Figure 3-2 Partisan Identification, Gallup Poll, 1937-2003



Note: Respondents who gave replies other than Democrat, Republican, or Independent are excluded. Question: "In politics, as of today, do you consider yourself a Republican, a Democrat, or an Independent?" Data for 2003 are through April 16. Data from 1988 and later are from telephone surveys, which tend to report more Republican and fewer Democratic partisans than in-person interviews. See Larry Hugiick, "Party Identification: The Disparity between Gallup's In-person and Telephone Interview Findings," *Public Perspective*, September/October 1991, 23-24.

Source: The Gallup Organization, "The Gallup Poll Party ID Trend to 1937," no date; unpublished data from the Gallup Poll.

Figure 3-3 Ideological Self-Identification of College Freshmen, 1970-2002



Note: Question: "How would you characterize your political views? Mark one: Far left, liberal, middle-of-the-road, conservative, far right."

Sources: Alexander Astin et al., *The American Freshman: Thirty Year Trends* (Los Angeles: Higher Education Research Institute, University of California, Los Angeles, 1997); *The American Freshman: National Norms for Fall 1997* (Los Angeles: Higher Education Research Institute, University of California, Los Angeles, 1997); *Fall 1998* (1998); *Fall 2000* (2000); *Fall 2002* (2002).

◎資料 2

1950年代の政治配置

	経済体制	外交	文化・社会	支持基盤
民主 党 リベラル	ニューディール リベラリズム	国際主義的反共	寛容	ニューディール連合
Wall Street 共 和党	修正的 ニューディール	国際主義的反共	無関心	東部実業家
Main Street 共 和党	反ニューディール反 福祉主義 反statism	単独主義的反共	モラリズム	中西部実業家・農民・小農 民
右翼	反ニューディール反 福祉主義 反statism	陰謀論	モラリズム	新興成金
南部民主党 (Thurmond)	ポピュリスト的 平等主義	---	反黒人 反ヤンキー	白人農民・労働者

◎資料 3

1960年代保守派の構成

	経済体制	外交	文化・社会	支持基盤
Wall Street 共 和党	修正的 ニューディール	国際主義的反共	無関心	東部実業家
ニクソン派 共和党	新連邦主義 反 福祉主義 反statism	デタント	「法と秩序」	中西部実業家・農民・小農 民
Easy Street 共 和党 (Goldwater/ Reagan)	反ニューディール反 福祉主義 反statism libertarianism	単独主義的反共	モラリズム 反リベラル	上層中産階層・サンベルト 企業家
極右		陰謀論		John Birch
南部民主党 (Wallace)	ポピュリスト的 平等主義	---	反黒人 反ヤンキー	白人農民・労働者

◎資料 4

アメリカ戦後右翼運動の系譜

第一世代 : Hayek, James Burnham, William F. Buckley, Jr., Russell Kirk, Whittaker Chambers, Frank Meyer, Henry Regnery, Hoover Inst.
第二世代 : Paul Weyrich (Committee for the Survival of a Free Congress, Coalition for America), Edwin Feulner, Jr. (Heritage Foundation) Richard Viguerie (direct mail fund-raiser). Howard Phillips (Conservative Caucus, 1974~), John Terry Dolan (National Conservative Political Action Committee), Jesse Helms (National Congressional Club), Phillip Crane (congressman), Jack Kemp (congressman), Larry McDonald (congressman) Phyllis Schlafly (anti-ERA activist), Morton Blackwell (Committee for Responsible Youth Politics, Leadership Institute), Patrick Buchanan (political columnist), Jerry Falwell (Moral Majority), Pat Robertson (Christian Voice), James Robinson, Edward McAteer (Religious Roundtable) Robert Billings (National Christian Action Coalition), Norman Podhoretz, Midge Decter, Stan Evans, Irving Kristol Robert Bartley (Wall Street Journal editor) Heritage Foundation, American Enterprise Institute, The Center for Strategic and International Studies, National Conservative Political Action Committee, Commentary, The American Spectator.

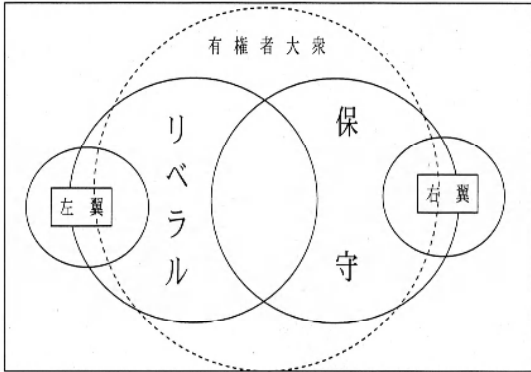
◎資料 5

新右翼政治運動の構成

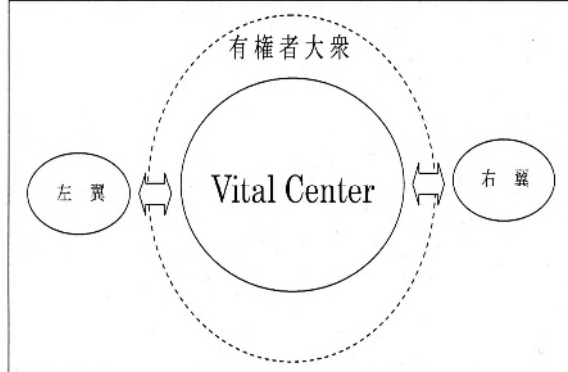


イデオロギー対立当事者イメージ

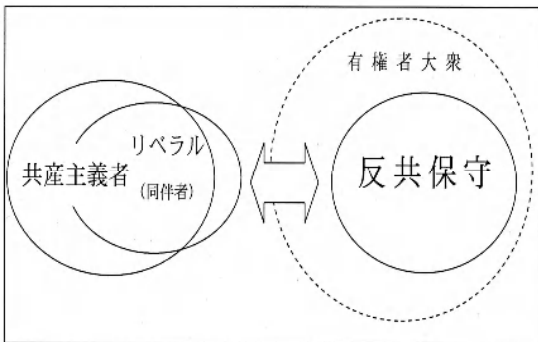
6-1 モデル



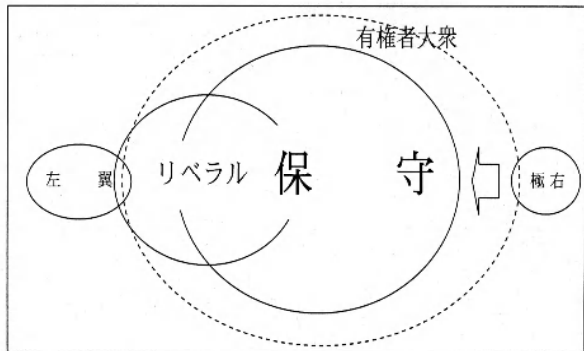
6-2 Vital Center



6-3 McCarthyites



6-4 共和党リベラル



6-5 レーガン保守連合

